内池備後守

甲州小池郡に住して武田信玄に仕えた。小池左近實利の三男武田氏滅亡後蒲生氏に仕え内池と改める。内池備後はのち姓を再び小池に改め、会津で町検断を務める

稲田数馬之助

氏郷の日野時代蒲生家の家老として政務をとる。元和八年（一六二二）町野門守が渡部治郎左衛門と訴訟を起こして辞してからは、稲田は、外池信濃守　本山豊前守　福西吉左衛門　とともに仕置奉行となる。

福西吉左衛門

蒲生忠郷の乳人（めのと）の息子

洪水と新田開発

此の村の小池徳美の掲額の文中に、年号について歴史年表にもとづいて考察するに、（　）内にあらためた、天和年中とあるは、天文とあらためるとごく自然である。

天文五年（一五三六）の白髭水（しらすげみず）の大洪水で岩崎山の東北の山裾より西へおもむき流れていた大川は陸地化してしまった。その後約百年が過ぎ、元和七年（一六二一）坂下組下金沢新田村に、新田宿が立たのを始め、続いて翌年、高田組新屋敷新田が開かれ、中荒井組、橋爪組の新田村が次々と開村された。保科正之公が寛永二十年に会津二十三万石の領主となり、新田開発がなされ、新田高は、五〇〇～六〇〇石余となった。北会津村の下米塚新田宿が立ち寛成二年（一七九〇）百七拾年もかけ鶴沼川の旧河川跡敷地（しきち）は開発がなされ、これ以上は耕地化が不可能な原野は旧川南地区には百六十町歩余が残っていた。

その原野は北会津村の農業構造改善事業によって北会津村には一坪の原野も無く消えてしまった。

天和元年（一六八一）洪水は八月七日に家世實紀に見えるが、主に湯川と飯寺の土手一〇〇間が押切られ、大川の東岸に氾濫して、城下町の穢多（えた）町、材木町、新町、侍屋敷小路、川原町、柳原などが浸水したとあり、大川西岸の北会津村沿岸の集落について被害についてはふれられてはいない。

宝暦六年（一七五六）の洪水については家世實記によれば、宝暦六年ではなく宝暦七年五月朔日の洪水となっており四月二十四日以来の大雨で大洪水、上米塚村は見えないが、下小松村、二日町、西沿岸の村が被害にあっている。おそらくこの洪水で上米塚村も被害にあっていたと思われる。このとしに熊野神社の御神躰を柏原へ移し奉つる。もとは、柏原の鎮守は伊勢宮とあるが、本郷町の宗像出雲が司さどっていた。

神明は、その伊勢神明という意味だろうと思われるが、寄宮、相殿にして、柏原に、上米塚、下米塚、新在家、松野、中新田を併せた六ケ所村からいろいろの神が合祀された。この様に近隣の村の鎮守の境内の整った所へ相殿併祠などの寄宮をし寛文十二年（一六七二）に会津神社表を編した。この頃にも寄宮があったのかも知れない。しかし名目上は相殿寄宮をしても鎮守神は各村の開発と関係が深く一部は混乱をおこし、古い空き宮、境内はそのまゝ残しておいて、村人は密（ひそ）かに参っていた様である。

天文の洪水に堂宇が流されて十王像が流されてしまったと、古文書に見える。元は壮宏なる神殿がどこに建立しておったかは不詳であったが、古老の云い伝えによれば古屋敷に鎮座しておったと云う。上米塚の絵図には古屋敷と云う地名は見当たらないが、永島清比古の所有の上米塚、村東（一二八六番地）宅地四九五平方米とあり、新しい堤防と旧堤防が交叉している中に存在しており往古は旧集落が存在していたことがうかがえる。旧大川の中には田畑の字名があり、洪水のあるたびごとに摩滅（まめつ）してしまった。

又小池伝吉は検断頭をつとめた。慶安二年（一六四九）保科正之公より安永元年（一七七七）容頌（かたのぶ）公頃まで一二八年間に家世實紀に見える。